

T・F・バクストン著『アフリカの奴隷貿易とその償い』（書評）

著者	細見 真也
権利	Copyrights 日本貿易振興機構（ジェトロ）アジア経済研究所 / Institute of Developing Economies, Japan External Trade Organization (IDE-JETRO) http://www.ide.go.jp
雑誌名	アジア経済
巻	10
号	2
ページ	106-108
発行年	1969-02
出版者	アジア経済研究所
URL	http://doi.org/10.20561/00052387

T・F・バクストン著

『アフリカの奴隷貿易と
その償い』Thomas F. Buxton, *The African Slave Trade and Its Remedy*, London, Frank Cass & Co., 1937, 582 p.

I

アフリカ諸国、なかんずく西アフリカのギニア湾沿岸地域がヨーロッパとの本格的な接触を始めたのは14~15世紀のころであり、それは主として金や奴隷の貿易によって行なわれた。そして、奴隷貿易は19世紀にいたるまで実に400年以上ものながきにわたって続けられ、そのあいだに数百万、あるいは数千万ともいわれる多数のアフリカ人奴隷が「輸出」されていったのである。

われわれが現代のアフリカを理解するにあたり、そこで行なわれた奴隷貿易をどのように位置づけることができるのであろうか。

第1の視点は、奴隷として「人間」を「輸出」することによって、アフリカの伝統社会がどのような変容を遂げたのかという問題である。これは、さらに次のような二つの側面に分けることができる。

その一つは、アフリカの伝統的農村社会が奴隷貿易によって優秀な労働力を喪失した結果、そこにおける農業の生産構造がどのように変化したかという生産の側面に関するものであり、他の一つは、奴隷輸出の見返りに輸入されたヨーロッパ産の各種商品が、アフリカの伝統社会においてどのように受け入れられ、かれらの生活態度をどのように改革していったのかという消費の側面にかかわるものである。

これに対して、第2の視点として指摘されるのは、アフリカから中南米地域への奴隷貿易を仲介することが、ヨーロッパにとってどのような意味を持っていたのかという問題がある。

アフリカの奴隷貿易はひとりアフリカ伝統社会の変容に影響しただけでなく、ヨーロッパの経済社会の発展に対してもきわめて重大な影響を及ぼしたと考えることができる。

しかし、ヨーロッパにおいてこれまでに公表された奴

隷貿易に関する書物は、単なる興味本位かあるいは懺悔に満ちたものが多く、総合的かつ客観的な立場にもとづく分析はまれであった。それは、ひとつには、局外者からみれば奴隷貿易の実態があまりにも残酷であったことにも起因していると思われるが、それにもまして重要なことは、ヨーロッパにとってアフリカの奴隷貿易が単なる「商取引」にすぎず、少なくともそれに従事する商人や船員にとっていかに利益を倍増するかということだけが主たる関心事であって、奴隷貿易自体がアフリカの伝統社会にとっていかなる意味を持っているのかを考える必要がなかった点にある。

そのような状況において、ここに紹介するバクストンの著作は、さきに述べたような多くの障害を乗り越えてアフリカの奴隷貿易を総合的かつきわめて冷静に分析している貴重な歴史的文献の一つである。

著者の経歴は必ずしも明らかではないが、本書の初版が公刊された1939年当時、ロンドンの「奴隷貿易廃止とアフリカ文明開化のための協会」(Society for the Extinction of the Slave Trade and for the Civilization of Africa) 会長の職にあったことからわかるように、アフリカの奴隷貿易に対しては批判的な立場を貫いてきた人物であったと思われる。

ところで、本書の出版に先だって、イギリス政府は1807年にスペインとの間に奴隷貿易の廃止のための協定を結んだのであったが、1830年代にいたってもアフリカの奴隷貿易は依然として続けられていた。このような状況の中にあって、著者バクストンにとって本書は以下の二つの重要な役割を与えられていたと考えられる。

その一つは、過去数百年の間行なわれてきた奴隷貿易が、アフリカの伝統社会をいかに混乱させ搾取してきたかということを指摘することにより、ヨーロッパにおいて奴隷貿易廃止の気運を高めるというものであり、もう一つは、奴隷貿易を廃止したのちのアフリカ社会に対して、ヨーロッパはそれまで行なってきた搾取の事実を謙虚に反省し、その償いをいかに行なうかについて具体的な提案をするというものであった。

II

著者は、第I部においてイギリス、スペイン、ポルトガルをはじめとするヨーロッパ系商人がアフリカの奴隷売買によっていかに莫大な利益をあげてきたのかについて、きわめて仔細に叙述している。

最初に、かれはアフリカからヨーロッパ商人の手によ

って中南米各地へ輸出されたアフリカ人奴隷について、その規模がどの程度のものであったのかを（それを推計することは、きわめて困難であるとしながらも）ブラジル、キューバ、プエルトリコ、プエノス・アイレス、あるいはテキサスなどの各地のイギリス人総督から本国の議会に提出された報告書にもとづいて、1827年から1830年にいたる4年間の平均でアフリカ人奴隷は毎年およそ15万人のものが「輸出」されていたことを推計している。

しかも、かれは奴隷貿易の規模をできるだけ正確に推測するためには、アフリカから中南米地域へ輸送される途中で死亡した奴隷の数をも加味しなければならないとして、利用しうるかぎりのデータによれば、輸送の途中、船内で死亡した奴隷の比率はアフリカ沿岸で船積みされた時点での奴隷に対して25～44%にも達した（p. 183）と述べている。加えて、アフリカの内陸で捕縛された奴隷が積出港で待機している間に死亡することなどをあわせて推計すれば、1000人のうちわずか300人程度の奴隷しか実際に中南米地域へ上陸するまで生き残ってはいなかったと思われる（p. 199）とも述べている。そして、かれは年間12～15万人の奴隷が中南米各地へ送り込まれた背後には、毎年25～28万ものアフリカ人奴隷が死亡していたのであり、けっきょく、アフリカの奴隷貿易に巻き込まれたアフリカ人は毎年40万以上にも達したと推測されるとしている。

1807年にはイギリスによって、奴隷貿易の廃止が宣告され、禁止令が制定されていたにもかかわらず、1830年代にいたってもそのように大規模に奴隷売買が行なわれていたのは、イギリスとスペイン両国による禁止協定に参加していなかったポルトガルの国旗が安い値段で各国の商人に売られ、その旗をかかげることによってイギリスの軍艦の臨検を避けながら奴隷貿易が行なわれたためであったとも指摘している（p. 211）。

そして、著者は「イギリス政府やスペイン政府が奴隷貿易の廃止に対して非常な努力を重ねていたにもかかわらず、依然としてそれが続行されていたのは、それが何よりも莫大な利益をもたらしたためであった」（p. 221）として、たとえば1838年ハバナ港ではアフリカ沿岸でわずか4ポンドで買い取られた奴隷が50ポンドという驚くべき高い値段で売られていた事実があることを指摘している。

このように、第I部で著者はアフリカの奴隷貿易の規模に関する推測にもとづいてそれがいかに莫大な利益をもたらしたかという点について、きわめて豊富な資料

（そのほとんどは、イギリス政府の植民地官僚から受け取った書簡や報告書である）を駆使しつつ詳細に述べている。

特筆すべきことは、当時、ヨーロッパ系の仲介商人たちが奴隷貿易によって巨額の利益をあげていたことを、単なる推測としてではなく信頼度の高い公文書にもとづいて明らかにした点であり、さらに、アフリカ社会において広く行なわれていた「人身供養」についても、その実態をほとんどあますところなく詳細に記述していることにもある。

次に、本書の第II部において著者は「奴隷貿易の償い」と題して、ヨーロッパ諸国はアフリカの奴隷貿易の廃止に努力を傾けるだけではなく、アフリカ社会の復興に対してはすすんでそれに協力しなければならないことを強調している。

すなわち、著者は、1830年代以前までにイギリスが採ってきた奴隷貿易廃止のための施策を批判して、「アフリカの奴隷貿易を廃止させるために軍事力が果たすべき役割はきわめて重要なものがあるとしても、ただ単に軍艦の数や軍隊の規模を増大するだけではなく、たとえば快速で機動性のある蒸汽船を配置することによって軍事力を効果的に利用すべきである」（p. 285）と提言している。さらに、軍事力だけによってアフリカの奴隷貿易を禁止させることができると考えるのは誤りで、「そのいまわしい貿易を廃止するためには、原住民たちの心からの協力を得なければならない」（p. 287）として、アフリカ人首長たちとの間で奴隷貿易廃止のための協定を結ぶべきことを主張している。

ついで著者は、奴隷貿易に代わってアフリカの経済社会を発展させるために、その恵まれた天然資源や自然環境などを存分に活用する必要性を説き、たとえば1834年に中部アフリカからイギリスへ輸出されたおもな商品はバーム・オイル、チーク材、ゴム、および象牙などにすぎなかったが、実際にアフリカ大陸が産出するものは農産物から畜産物、鉱産物、および水産物にまでその種類は枚挙にいとまがないほど豊富であることを指摘している。

そして、奴隷貿易を実質的にも廃止させるためには、その豊富な資源と恵まれた環境条件とを十分利用することによって、アフリカ社会に商業を定着させ、ついで比較的等閑視されてきた鉱物資源の開発を行なうと同時に、ヨーロッパでの需要が増してきたコーヒーや棉花などの商品作物の栽培も本格的に行なわれなければならないと

述べている (pp. 310~340)。

このような積極的な提言を行ないながらも著者は、かれの示した提言はあくまでもアフリカ人自身の主体的な意思にもとづいて実施されるべきであって、第三者たるヨーロッパ諸国はアフリカ人に協力することはあってもかれらの意思を無視して介入することはすべきでない点を注意している。

しかし、著者といえどもアフリカ人自身がどの程度の主体的能力を備えているかという点について疑問を持ち「アフリカ人は知性を開発することができるのであろうか?」「われわれは、アフリカ人に何をどのようにして教化すればよいのだろうか?」(p.457)と自問している。そして、アフリカ原住民の間には迷信が根強く、かれらが驚くほど無知であることは確かであるとしながらも、それはアフリカ人が先天的に劣等な素質しか持ちあわせていないことに原因するものではなく、かれらの置かれてきた状況によると述べて、そのような環境を改善することによってやがてアフリカ人の知性も高揚されるであろうとしている。かれによれば、その場合キリスト教はきわめて重要な役割を果たすことになるのである。

III

著者バクストンは、本書の第I部において、アフリカの奴隷貿易がきわめて長期間にわたり、血なまぐさい残酷な手段を用いて行なわれたことを強調し、そのように非人道的な奴隷貿易を撤廃させるためにこそイギリスは多額の財政支出を負担するという努力を払ってきたのだと述べている。

そして、撤廃のために積み重ねられてきた努力のわずかだがほとんど完全に失敗したのは、奴隷貿易が莫大な利益を生む“金の卵”であったことにもよるが、同時にアフリカ社会において「人身供養」というような迷信と残忍さに満ちた慣習がすでに存在していたことにも起因すると指摘している。

しかし、アフリカの奴隷貿易は、ただ単にそれを仲介したヨーロッパ系商人のみに巨額の利益をもたらしたのではない。中南米各地のイギリス領植民地などにあったプランテーションに対して、多数の低廉で強健な黒人労働力を供給するとともに、家内工業から工場制工業へ脱皮して産業革命を推進するのに必要とされた商品市場の拡大と、資本の調達を可能にした点において、アフリカの奴隷貿易はイギリス資本主義経済の発展にこそ最も重要な貢献をなしたと考えるべきであろう。

さらに、著者が指摘する「人身供養」などのアフリカ社会における野蛮きわまる慣習については、それは必ずしもアフリカ社会に個有的なものではない点からみて、アフリカ人を残酷で迷信に満ちたものであるとすることはできない。

アフリカ社会自体が奴隷の販路をひらくために奴隷貿易を要求したのではなく、中南米やヨーロッパからの奴隷需要があったればこそ貿易が始められたのであり、その結果、アフリカ社会の平安と泰平ムードが破壊され激しい戦乱と暗黒の社会が生みだされていったと考えるのが妥当なのではないだろうか?

ここに指摘したように、本書は重要な二つの視点からの分析を欠くものである。

しかし、本書が刊行された19世紀前半のイギリス経済社会の状況を考えれば、著者がきわめて大きな限界を負っていたことは容易に想像することができる。そのような状況の中にあっても、なおかつ俗説に迷わされることなく著者がアフリカ原住民の能力(素質)について冷静かつ正当な評価を下しえたことは著者の真実を見ぬく目の鋭さを示しているといわなければならない。

(調査研究部 細見真也)